

COP10で、生物多様性と経済成長を考えるイベント開催

01



ハイレベルフォーラムで「民間企業やNGOとさらなる連携を図っていきたい」と話した大島賢三・JICA副理事長(中央)

10月に愛知県名古屋市中区で開かれた「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」は30日、「名古屋議定書」の採択をもって閉会しました。議定書には、植物や微生物の遺伝資源の利益を、原産国にも公平に配分することなどが定められたほか、全参加国は2010年以降の世界目標「愛知ターゲット」に合意しました。

期間中の26日、JICAは生物多様性条約(CBD)事務局との共催で、「開発協力における生物多様性に関する名古屋ハイレベルフォーラム」を開催。70の国際機関や各国の援助機関の代表者が集結しました。このフォーラムでは、生物多様性保全を開発協力を主流化させるための「開発協力における名古屋宣言」が採択。「生物多様性の国家戦略の重要性を高め、活用すること」「先住民や現地の人々に対する配慮や伝統的な暮らしに敬意を示すこ

と」「環境に配慮した政策決定が必要であること」などが盛り込まれました。

このほかにJICAは、2つのサイドイベントを開催しました。25日に行われた「アフリカに学ぶ自然との共生」では、各国から約80人の関係者が参加。エチオピア・オロミア州森林公社のギルマ・アメンテ総裁が、生態系や環境に配慮したコーヒー生産により農家の収入を向上させたJICAの協力について発表。生物多様性保全と経済成長の両立の可能性を示しました。またJICAも、アフリカでのこうした取り組みを支えたい方針を表明しました。

27日には「貧困削減と生物多様性」をテーマにイベントを開催。基調講演を行ったマレーシア政府科学顧問(元国連大学高等研究所長のザクリ・アブドゥルハミド博士は、生物多様性を経済的に評価することの重要性を指摘。「生物多様性の保全活動に経済的価値を見いだすことで貧困削減は実現できる」と話しました。さらに、アジアやアフリカ、中南米の国際機関や国際NGOそれぞれが、生物多様性の保全活動について報告。その後、多くの参加者から「生物多様性保全のカギは、地元住民に経済的な利益をもたらすこと」という声が上がると、JICAは、国際機関や国際NGOとの連携による課題解決の必要性を訴えました。

「なんとかしなきゃ! プロジェクト」をアピール

02



「なんとかしなきゃ!プロジェクト」のサポーター登録を行う来場者

10月16・17日に福岡県北九州市で「北九州エコライフステージ2010」が開催されました。約10万人が足を運んだこのイベントは、環境問題に取り組みむ市民団体や企業などが、自分たちの活動内容を市民に広く知ってもらうためのもの。JICAもブースを出展し、途上国の森林保全や大気汚染対策などを来場者に伝えました。

また23・24日には、中部地域最大の国際協力イベント「ワールド・コラボ・フェスタ2010」が愛知県名古屋市中区で開かれ、約9万人が来場。JICAも生物多様性保全の取り組みを紹介しました。

この2つの国際協力イベントでは、JICA職員や青年海外協力隊OB・OGが協力して「なんとかしなきゃ!プロジェクト」もアピール。ワールド・コラボ・フェスタのイベントステージでは、プロジェクトの著名人メンバーであるタレントの原田さとみさんやラジオパーソナリティの空木マイカさんがプロジェクトへの参加を呼び掛けました。

JICAのプロジェクトが「IAUDアワード2010」大賞を受賞

03



栄えある大賞に選ばれ、賞状を受け取るフィリピンのプロジェクト関係者

11月1日、JICAがフィリピンで実施する「地方における障がい者のためのバリアフリー環境形成プロジェクト」が、「国際ユニヴァーサルデザイン協議会(IAUD)アワード2010」の「大賞」に選ばれました。

この賞は、障がい、年齢、人種などに関係なく、誰もが快適に利用できる施設やサービスなどを設計する「ユニバーサルデザイン(UD)」の普及・拡大に貢献した活動を表すもの。UDという考え方の普及が遅れているフィリピンでバリアフリーな社会づくりを進めていることがUDを広める上での第一歩だとして評価され、受賞に至りました。

国際UD会議の会場(静岡県浜松市)で行われた表彰式には、フィリピンのプロジェクト関係者6人が出席。国家障がい者協議会のミエラ・セデニオさんは、「この賞の受賞で、プロジェクト関係者のさらなる協力が期待される。今後も自信を持ってプロジェクトに取り組んでいきたい」と話しました。